



位川澤股

躬澤有所

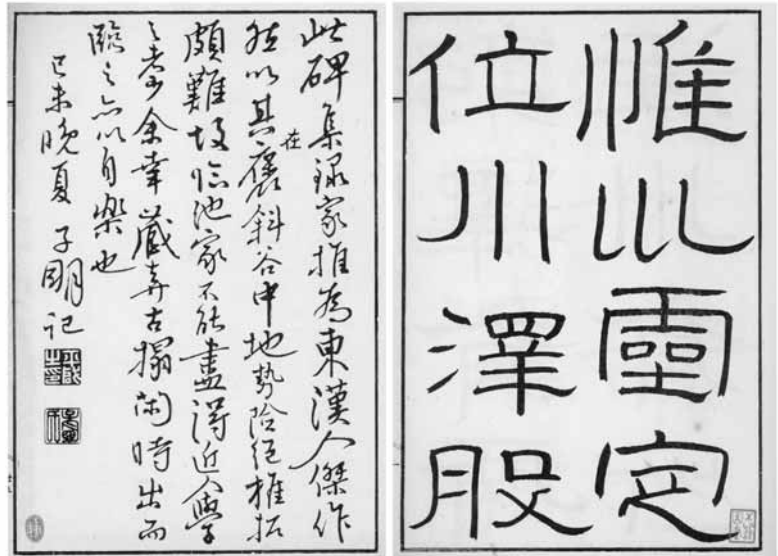
「落ち穂拾い記」⑦⑦

「石門頌」漢・建和2年(148)

図②佐久間象山・対聯



図①象山先生・石門臨書帖



現在では、普通に漢魏六朝時代の多種の碑刻の書を古典として学習することが、行われている。漢時代の摩崖刻石の「石門頌」は、親しみやすい隷書の碑刻作品ではなからうか。文字も大きく、やや荒削りで伸びやかな書風を示し、見事な八分隷書の「礼器碑」「乙瑛碑」とは、趣を相当に異にする。明治初年に来日した楊守敬が、漢魏の金石碑刻の書を日本の書壇に伝えたとき、多くの著作に記されている。「石門頌」の拓本も楊守敬が日下部鳴鶴に譲り渡したのが伝えられ戦前に出版されている。しかし、楊守敬による紹介以前に、江戸時代末期に「石門頌」の拓本を入手し、臨書し、自己の書法に取り入れた人物として、幕末の洋学家・佐久間象山(1811~1864)がいる。夥しい金石碑帖等を収蔵、研究、さらに自己の書画に取り入れた中村不折が、大正年間に刊行された「書道及画道」誌に、「漢隷の書始は、佐久間象山」という記事を發表している。不折翁によれば、象山は「石門頌」の整拓本を二件入手し、一つは掛軸にし、もう一つは、剪装して折帖にして手本とした。さらに佐久間象山旧蔵の剪装本「石門頌」が、かつて私(不折翁)のところに300円で買わなにかと持ち込まれたことがあったが、石門頌はすでに所蔵し、当時でも10円ぐらいで同じものがあるので、研究面からさほど必要がないので買わなかった。小生も江戸期の唐様書道の関心があり、当時の資料をいろいろ探し求めてきた。その中に、佐久間象山の「石門頌の臨書本」(木版本)がある(図①)。奥付や題簽がなく刊行年月は不明であるが、木版刷りや造本から江戸末から明治前期の刊行とおもわれる。巻末に数十字の跋が書かれている。「この碑は、著録家によれば漢時代の傑作である。しかし碑が褒斜の谷中にあり、地形が険しいので、取拓が非常に難しい。書を学ぶものが拓本を得ることはできないし、これを学ぶ者は少ない。私は幸いに古い拓を所蔵しているので、暇な折に出してこれを習い、自ら楽しんでいく。己未(1869)晚夏、子明記す」と。佐久間象山が暗殺される5年前である。この臨書本は、碑文の全体を収録しており、相当に習われたと想像される。家蔵の佐久間象山の対聯の隷書作品は、やや細身の伸びのある筆勢である(図②)。象山は書学においても、江戸後期の唐様の曹全碑や唐の隷書碑を学んでいた人々とは異なり、一步先を進んでいたようである。右頁に主図版としてしめた「石門頌」は、実に丁寧な拓された精拓本であり、文字の字画が鮮やかに拓出されている。戦前の画家・江上瓊山(1862~1924)の旧蔵本である。

伊藤滋(書齋名・木鷄室)

書のひろば

理事長 下谷洋子

第77回毎日書道展

事務局合同会議開催

4月9日(木)、如水会館にて第77回毎日書道展の事務局合同会議が開かれました。2月の運営委員会にて大綱が決まり、本日77回展がスタートします。昨年同様毎日新聞社、毎日書道会役員の先生方その他、各部の部長副部長、主任クラスの先生方に出席していただき、全体会議終了後、各部に分かれて打合せをしました。今年から鑑別審査が5月に一本化されるため、各部の日程も若干異なります。

本院は、当番審査員とともに事務方にも多数関わっていますので、よろしくお願ひします。

毎日理事小委員会開催

事務局合同会議後、同会館で理事小委員会が開かれました。

1. 令和7年度収支決算案について
2. 第77回毎日書道展について
3. 毎日書道会企画委員会について
4. 国際書道(インドネシア)交流展について

昨年から始まり好評だった毎日書道会理事・監事によるギャラリートークは、今年は日程も増やして行うことになりました。

その他も含めイベント等の日程は後日掲載します。

特別昇段昇級試験実施

本誌の春季昇段昇級試験の審査が4月23・24日と事務所に実施されました。春は、漢字条幅とかな半紙に三種があります。三種は秀级以上から師範を目指す方に受験資格がありますが、年に1度のチャンスとなります。上段にいきますと、現級留め置き制度もあり、何度も挑戦することにもなります。結果の総評は本誌6月号に掲載されますので、残念な結果で終わった方は、また一年じっくりと勉強されて備えて下さい。



審査風景

近々の書展紹介

書壇院ギャラリー

第123回展〈企画展示〉

拓本の魅力に迫る

会期 令和8年4月21日(火)～6月7日(日)

開館時間 10:00～17:00

※入館は16:30まで

休館日 月曜休館日

臨時休館 5月3日(日)～7日(木)、5月9日(土)

会場 書壇院ギャラリー

東京都港区虎ノ門5-5-1
アークヒルズ仙石山テラス101

☎03-6721-5701

春日井市道風記念館

館藏品展「心とこの書」

会期 令和8年4月23日(木)～7月12日(日)

開館時間 9:00～16:30

休館日 月曜休館日

※5月4、5、6日は開館

会場 春日井市道風記念館

愛知県春日井市松戸町5-9-3
☎0568-8226110

成田山書道美術館

収蔵優品展 明治大正の書

会期 令和8年4月28日(火)～6月14日(日)

開館時間 9:00～16:00

休館日 5月7、11、18、25日、6月1、8日

※最終入館は15:30

会場 成田山書道美術館

千葉県成田市成田640

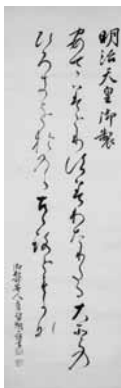
☎0476-24-0774

明治から大正にかけて、活躍した書家の多くは、西洋思想と大陸からもたらされた碑帖をはじめとする資料を礎に、自らの表現を開拓していきました。

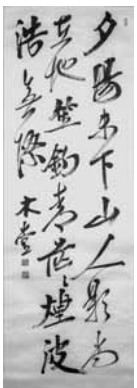
今回の展覧会では、中林梧竹や日下部鳴鶴、巖谷一六といったこの時代を代表する書家ばかりでなく、当時の文化環境に根ざした作家を幅広く取り上げます。

この時代の書について体系的なコレクションを形成している書道美術館ならではのといえる展覧会です。各人各様の魅力に溢れた明治大正の書をご覧ください。

大口周魚「明治天皇御製」



大養木堂「五言絶句」



三輪田米山「忍之一事衆妙之門」



漢字書基礎基本講座 (24)

種谷萬城

①郭店楚簡 老子乙1 全体像



②郭店楚簡臨書「絶字亡憂」



③郭店楚簡 点画



④郭店楚簡做書「天馬行空」



▶①郭店楚簡 老子乙1「也。亡為而亡不為。絶学亡憂。唯与呵、相去幾何美与惡、相去何若」

篆書4 郭店楚簡

郭店楚簡は、1993年に湖北省荊門市郭店村の戦国中期(前300年前後)の堅穴墓で出土。発掘された竹簡は、有字簡が730枚。内容は戦国時代の典籍で、主として道家と儒家の書跡。郭店楚簡の文字は恐らく専門の書写集団によって抄写されたもので、数人の手による書風の違いが見られます。図版の竹簡は、「老子」を写したものの。文字は、幅5ミリメートルほどの細い竹簡に1行書きの細字ですが、拡大して見ても筆画は極めて鮮明です。書体は戦国時代の楚国で通行していた筆写体の篆書で、いわゆる楚系文字です。右上がりの結構や、旺盛な円転のリズムを主とした書は、筆による表情豊かな線が伸びやかです。書法的にかなり優れたもので、生き生きとした書は、魅力に溢れています。

※YouTube「筆のサロン」に臨書と做書の関連動画を配信しました。是非参考にして下さい。QRコードでアクセスできます。



基礎基本講座

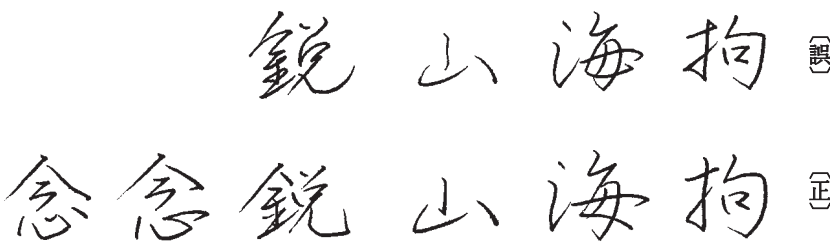
ペン字基礎基本講座 (4)

川村美泉

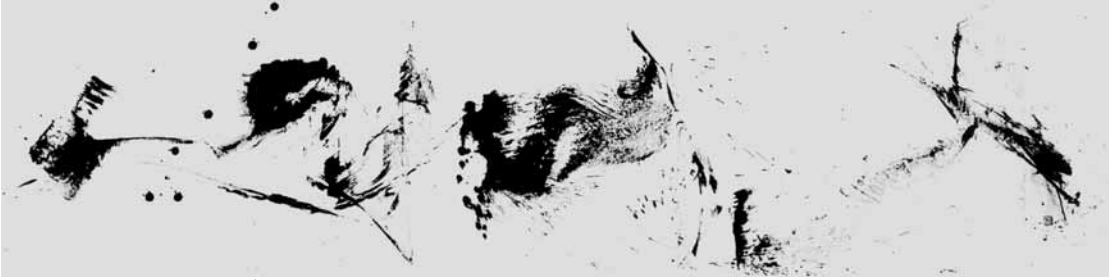
今回は、私達が日常生活でよく使う行書についてお話をします。行書は、点画に連続が見られ、筆脈も表われてくるようになります。直線的に書いてしまうとギクシヤクとして不自然な印象になりますから、点画を柔らかく、懐広くゆったりとした雰囲気書き上げよう心がけたいものです。

行書を書く時の注意点をいくつかあげてみましょう。

- ①直線的につなげるととげとげしくなる。
- ②線を丸くするとけじめがなくなる。
「柔らかく」と「丸く」は違う。
- ③筆圧不足は頼りない文字に見える。
ある程度、指先に力を込め筆圧を加える。
- ④続けすぎは騒々しくなり、読みづらい。
ただ続ければ良いと思うのは間違い。
- ⑤行書の書き方は、一つとは限らない。
いろいろな書き方があることを知る。
- ⑥行書は、表現の幅が広いから、次回、
点画の方向や省略 ⑦筆順について
をテーマにして引き続きお話をさせていただきます。



書道芸術院 令和の群像 (2026)



第78回書道芸術院展「杜」

佐々木 浩子 書



佐々木浩子(富山)

「見る」と「書く」と

我が家に相澤春洋の屏風と蓮月の水差しがあります。母がとても大切にしていたこともあり、幼い頃から気になっていました。ちょうど、目の高さに文字があったからか、大澤雅休の「山嶽重疊」より目を引きました。春洋の屏風には、絵もあるけれど、絵よりも賛に目が行きます。蓮月は、もちろんレプリカですが、たぶんこの細い柔らかな線に惹きつけられたのでしょう。ただ、これらが自分で読めるようになりたいがために、母の師でもある、深松海月先生のもとへとおけいこに行くようになりました。17歳の頃でした。

最初から「かな」だけを習い、高野切第三種の単体から始まり、2字連綿、3字連綿…へと。そうしてどうにか1首書き。水鉛を伸ばすが如くに根気よく真心こめて丁寧を教えて頂きました。

ところが、そのうちに師によって、前衛書という魔法にかけられてしまいます。この世界では、1字を温めて書く。あるいは、ことばを咀嚼し、膨らませ、それから心の動きを筆を通して

て形となして表現いたします。そして、それは、精神と直結したきびしい世界と解釈しております。

今夏、母の遺した書籍の中から、大澤雅休『平原書林』(昭和24年発行)を見つけました。書とともに文学者としても、名を馳せた人。編集後記を何度も読み返しております。母の友人から雅休のことを「論客」の人だったとも聞いた覚えがあります。戦後の「表現の自由」の道を歩き始めた頃に書かれたこともあり、より熱気が伝わってきます。「一心に集中して、古典のすばらしい書美の世界に没入して下さい。」と、結んであります。

我が師、深松先生も終生、古典を探求していらっしやいました。日に、3時間、4時間と、お好きな古典と何度も繰り返し向き合っていたらっしやいました。

これから冬に入ります。雪が降れば、このせかせか人も、机にゆっくりと向かう時間も増えるでしょう。好きな古典、古筆をさらによく見て、そのよさや美しさを感じるところから改めて始め、そうして、次の作品の糧となるものを見つけないと思えます。令和7年師走朔日記

新 鋭 礼 讃

漢字部・審査会員候補

中野 柳明 (広島県)



所属 水菱会
師名 竹本龍汀

参加している書展
毎日書道展・長野
県現代書藝全国展



「一段風光畫不成」

作品自評

いつも書作品を制作するにあたり、漢詩の意味もある程度は重視するものの、いざ創作するとなるとやはり字面を重視しがちで、今回も自分がいかに楽しく書けそうかという観点でこの漢詩句を選びました。「この心地の風光は絵にも表現できない」、そも私は絵が苦手なのでイコール「書」での表現となるのですが、この作品から少しでも楽しさが伝われば現状、自分の中では成功で、でも自己満足だけ、好きなパターンの多用ではなく、他のパターンを探り、表現の幅を広げていく必要があると日々感じていきます。書活動における課題

亡き師は私の感性を大事にしてくれて、

でも困った時は臨書に立ち返るようにと。皆より経験値も能力自体も劣る、そんな現状においてやはり表現の幅を増やし、多様なニーズに対応するべく、好き嫌いは言っていられないので、少しづつでも吸収していけるように頑張ります。

今、伝えたいこと

講習会参加をきっかけに競書で他部門へも少しづつ挑戦するようになり、自主学习だといわず嫌いしがちで系統も偏ってしまうので、部門に関係なく出品でき、かつ身内以外から純粹に評価を貰える環境が、今の自分にはとてもありがたい、良い機会をいただけて感謝しています。

近代詩文書部・審査会員候補

佐久間 歩 (宮城県)



所属 宮城野書人会・
澄書道塾
師名 佐久間玉流

参加している書展
毎日書道展



「さくら貝の歌」

作品自評

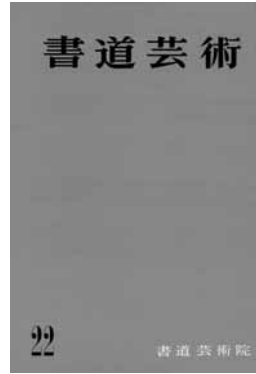
今回書いた詩は「さくら貝の歌」です。詩の内容は恋人を亡くした悲しみと、それでもその恋人への消えぬ想いを桜貝に重ねるといふもので、悲しくも美しい情景だと感じ、題材を選びました。超長鋒を使用し、練質、潤濁、文字の大小をどのように置くか考えて制作しました。「悲しさ」の部分については、細い線で表現、「消えぬ想い」の部分は墨だまりの潤と濁筆にて表現しました。また、「桜貝」はピンク色の綺麗な貝です。桜貝のように墨と黒の部分と余白の白のバランスが綺麗につき合うよう工夫しました。まだまだ未熟な部分が多々あると制作する度に感じていきます。墨の潤濁や文字のバランス等の引き出しを今後さらに増やしていくためにも、時間を作って臨書

に励みたいと感じています。書活動における課題

私は社会人であり、あまり書活動に時間を割けられないと感じています。筆を長い期間触れていないという時も年に多々あるところです。師である母の佐久間玉流や、私と同じく母に師事している姉、佐久間玉瑛がいるのでなんとか続けられています。今は、展覧会や課題を与えられて、なんとか書を継続している状態です。今、伝えたいこと
私は漫画やゲームが好きで、書道作品を書く際はよくアニメの主題歌の歌詞を選んでおります。主題歌でなくとも、好きなアーティストの歌の歌詞を選ぶ時もある。世間では書道はお堅いイメージを持たれているとは思いますが、こういう題材でもいいよ、と同世代の人達に伝えたいです。

この作品は、書道部員として参加した際に、この日は春の浜辺にわたる夕陽を拾い集めて、

『書道芸術』クロニクル(4) 第22号



発行日 昭和34年(1959)9月1日
編集兼発行人 香川峰雲

印刷 吉田印刷株式会社

総頁 24ページ(表紙含む)

価格 80円

口絵写真 居延木簡・大唐中興頌・銅柱

記・京極前関白太政大師集・

筆友会展作品・研究部優秀作

品

手本揮毫 川崎梅村・石田耕堂・

石田霞洞・山本聿水・

高橋樹石・井手正風

競書成績 研究部：特選9名・秀作8名・

入選7名

規定部：216名(秀級〜10級)

随意部：161名(優級〜10級)

臨書部：46名(5級〜10級)

条幅部：37名(5級〜10級)

篆刻部：5名(1級〜10級)

競書短評 研究部15名(写真版は3名)

規定部37名(写真版は18名)

篆刻については香川峰雲が、古典の模倣ではなく、現代に生きている篆刻であってほしいという注文をしている。

種谷扇舟は第2回前衛書展の本院一般公募作に対し「張り切って書き、人間的な苦悩を示してもいて好感が持てる」と評した。

②に関しては、この号から孔子廟堂碑、興福寺断碑、書譜、関戸本古今の倣書の方法の解説が参考手本付きで新たに始まった。従来の臨書、篆刻、前衛書、新調和体(現在の現代詩文書)の講座も継続して、まとめて「第二期」としている。それぞれ半ページを使って4ページをあてている。

③は夏に大阪市立美術館で90点が展示された展覧会の批評会でのコメントをまとめた。川崎梅村宅に15名が集まった。

④では研究部の前衛と詩文書作品2点(毎日展入賞レベルだと評価された。

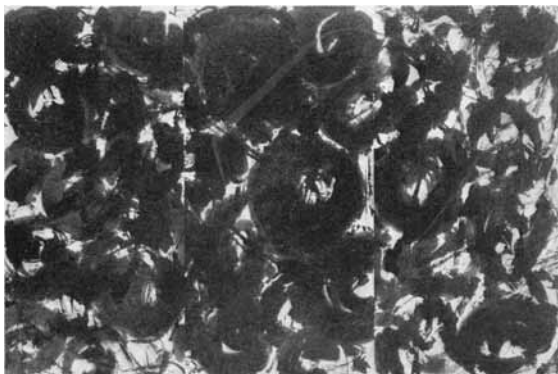
⑤について。7月30日締め切りで、初めての昇級試験が行われたが、その結果の発表。規定部は楷書、随意部は楷書以外の書体、臨書部は過去3号の課題から選択。すべて半紙である。規定部は最高

が二段、随意部も二段、臨書部は1級であった。参加者の延べ数は57名。また同時に「師範試験」が施行され、指定の20字を条幅に楷・行・草で1枚ずつ、さらに短歌一首をかままたは調和体で条幅1枚、加えて光明皇后染論を条幅に20字で臨書するというもの。条幅5枚を制作するのはハードルが高く、案の定、師範合格者は出ず、かろうじて準師範に5名が認定された。それ以外は不合格で人数は公表されなかった。「師範試験」は書塾経営のため肩書きを院が認める、という意図があったように思われる。

香川春蘭は第三部の近代詩文書について「混沌として煩わしい」と書く。墨色の濃淡を無理に出し、それを故意に配置して模様を浮き出すようなやり方への批判である。うるさい飛白、筆の割れなど末端の技術に浮き身をやつしてはならない、と手厳しい。



筆友会展より 多田 観山



毎日賞 榊原美知江

第79回書道芸術院展〈2〉

(併催 第77回全国学生書道展)

実行委員長

小竹石雲

第79回書道芸術院展(併催第77回全国学生書道展)は、昨年(令和7年)3月22日の理事会において決定された大綱に基づき開催された。

○第79回書道芸術院展

1 会期 令和8年2月5日(休)

2月11日(水)・(木)

2 会場 東京都美術館(上野公園内)

3 募集規定

ア 無鑑査、一般公募の部

・ 作品・書類搬入

令和7年11月20日

・ 鑑別・審査

令和7年12月6日・残務7日

イ 審査会員、審査会員候補の部

・ 書類搬入 令和8年1月17日

・ 作品搬入 令和8年1月27日

ウ 審査

・ 審査会員候補

令和8年1月28日

・ 審査会員 令和8年1月29日

4 作品解説会(都美術館)

令和8年2月8・11日

5 一般表彰式(浅草橋ヒューリックホール)

令和8年2月7日

6 出品者の集い(浅草橋ヒューリックホール) 令和8年2月7日

7 出品作品サイズ(単位cm)

(1)財団理事・監事

A 91×242 B 152×152

C 121×182

(2)財団評議員・参事・審査会員

D 61×242 E 79×182

F 85×176 G 106×136

H 121×121

(3)審査会員候補

I 61×182 J 73×152

K 91×121 L 105×105

(4)無鑑査

M 46×167 N 86×86

(5)一般公募

O 35×136 P 25×167

Q 65×86

書作品

篆刻作品

R 30×39

S 51×61 T 30×91

U 35×67.5

8 一般公募出品料

(1)30歳以上 7000円

(2)30歳未満および70歳以上 3000円

9 運営委員会

○運営委員長 下谷洋子

○運営委員 小竹石雲 後藤大峰
千葉蒼玄 飯沼恵鳳

○第77回全国学生書道展

1 募集規定

ア 出品資格

第1部 幼児、小学生

第2部 中学生

第3部 高校生

第4部 大学生、専門学校生

イ 部門①半紙の部②半切の部の部、両部門に出品できる。

ウ 作品受付 令和7年10月20日

エ 審査 令和7年10月30日

11月3日

才褒賞 A 個人賞

B 団体賞

2 学生表彰式(浅草橋ヒューリック)

稲垣小燕 川島舟錦

北村白琉 小林琴水

坂本素雪 高田幽玄

種谷萬城 津田海仙

名越蒼竹 半田藤扇

平川峰子 山口仙草

田村郷雲 西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄

後藤大峰

大内熒軒

佐藤菜扇

都丸みどり

山口仙草

三浦鄭衛

前田龍雲

近藤尚子

川島舟錦

小林琴水

高田幽玄

津田海仙

半田藤扇

クホール) 令和8年2月7日

3 運営委員会

運営委員長 下谷洋子

以下実行委員長、実行副委員長、

陳列部長、会計部長、事務局次長、事務局次長は院展と学生展共通。

総務部長 藤村昌子

審査部長 半田藤扇

表彰部長 倉林紅瑠

揮毫部長 大平邑峰

4 審査役員

A賞審査員(6名)

A賞選考委員(9名)

中央審査員(17名)

5 指導者作品展示(153点)

ア 出品資格

・ 本展出品指導者

・ 「書道芸術院学生版」指導者

・ 書道芸術院審査会員

イ 作品寸法

・ 半紙額内自由

○運営委員会

第79回書道芸術院展運営委員会を令和7年6月21日の理事会に合わせて行った。

* 審査会員の作品について

〈褒賞〉

書道芸術院春華賞(1名)

選考は運営委員(財団理事・監事)が担当。

(名誉会員、参事会員、選考委員、

参事で過去の理事・監事経験者、過

年度受賞者は対象外)

春華賞候補作品には亦シールを添付し公表した。また理事・監事の代表者による「選考委員注目作」と、外部の先生による「評論家の眼」を選出し、寸評を掲示した。

* 審査会員候補の作品について

〈褒賞〉

書道芸術院大賞(1名)
書道芸術院準大賞

白雪紅梅賞(各部を通して5名)
白雪紅梅賞(各部を通して若干名)
書道芸術院俊英賞

(各部を通して若干名)

○ 選考委員は運営委員(財団理事・監事)が担当。

* 無鑑査の作品について

院賞、毎日新聞社賞、特選、秀作とする。

○ 審査員

漢字部 主任 岩垣若翠はじめ10名
かな部 主任 小島孝子はじめ5名
現代詩文書部

主任 菊池富美子はじめ7名
篆刻・刻字部

主任 大沼樵峰はじめ2名
前衛書部

主任 柳橋香仙はじめ7名

○ 審査事務委員

漢字部 主任 藤原聖美はじめ9名
かな部 主任 木村関泉はじめ3名
現代詩文書部

主任 神谷雲卿はじめ6名
篆刻・刻字部

主任 加藤暢流はじめ2名
前衛書部

主任 野口加奈はじめ8名
* 一般公募の作品について

〈褒賞〉

入選作品のなかから審査して、準特選、佳作、褒状を与える。

○ 審査員

漢字部 主任 三浦鄭街はじめ7名
かな部 無鑑査審査員と兼任

現代詩文書部 主任 広瀬舟雲はじめ6名
篆刻・刻字部

無鑑査審査員と兼任
前衛書部 無鑑査審査員と兼任

無鑑査審査員と兼任

○ 審査事務委員

漢字部 主任 中尾琴麗はじめ6名
かな部 無鑑査審査事務委員と兼任
現代詩文書部

主任 臼井真理はじめ5名
篆刻・刻字部

無鑑査審査事務委員と兼任
前衛書部

○ 実行委員会

第79回書道芸術院展実行委員会を開催。併催の第77回学生書道展についても同様。

○ 第79回書道芸術院展作品搬入

・一般公募出品数

438点 昨年比23点増

・無鑑査出品数

587点 昨年比56点減

・審査会員候補出品数

593点 昨年比3点増

○ 鑑別・審査

・審査会員出品数

501点 昨年比14点減

一般公募と無鑑査作品の鑑別・審査が、令和7年12月6日共和会館において行われ、漢字部と現代詩文書部は7日が残務となった。少数でのスタッフ体制であったが、手際よく運営され、無事終了できた。

○ 無鑑査に対する賞

院賞8点

(漢4、かな1、現詩2、前衛1)

毎日新聞社賞4点

特選65点

秀作163点を決定入賞率40%

○ 一般公募に対する賞

準特選31点

(漢13、かな4、現詩10、前衛4)

佳作87点

褒状145点

入選175点を決定

入賞率60%

○ 審査会員候補に対する特別賞選考

令和8年1月28日

東京都美術館地下審査室

○ 審査会員に対する書道芸術院春華賞選考

令和8年1月29日

東京都美術館地下審査室

詩文書部・須藤雪蓮さん(青森県)、書道芸術院準大賞5点

(漢2、か1、現詩1、前衛1)

白雪紅梅賞10点

(漢4、現詩4、前衛2)

書道芸術院俊英賞43点を決定。

春華賞は前衛書部・岩上郁子さん(群馬県)となった。

○ 第77回全国学生書道展

第77回全国学生書道展には北海道から九州まで全国から作品が寄せられ、令和7年10月20日に締め切った。

半紙の部80点、半切りの部200点。

審査は令和7年10月30日～11月3日にかけて、A賞審査員6名、A賞選考委員8名、中央審査員17名によって行われた。優秀作品が多く、一作一作に時間をかけて審査。

その結果、全国学生書道展大賞に半紙の部7点、半切りの部3点、準大賞に半紙の部16点、半切りの部8点が選ばれた。

なお、上位入賞者の作品と個人賞の氏名、団体賞については、第77回全国学生書道展成績表冊子に掲載された。都美術館では見応えのある作品が地区別に展示され、熱気あふれる展示となった。

○ 陳列部

2月4日、三浦鄭街陳列部長のもと、院展、学生展、指導者作品展を含む計200点という膨大な数の作品展示を行った。

今回も、陳列部員を中心に、作業にあたる人員を少なくして陳列業者(川端商会)に作業員の増員をお願いした。

○記者会見

毎日新聞社ほか報道関係、評論家の方々にお集まりいただき、運営委員長・実行委員長による展覧会概要、審査部長による審査報告、常務理事による学生展概要の説明が行われた。

○評論家の眼

毎日書道会参事、書壇院顧問の柳澤朱算様に依頼、作品評価をいただいた。批評は作品脇に掲示し、さらに印刷して参観者にも配布した。

「柳澤朱算」の眼

秋山久枝、池田沙静、伊藤牙城、宇田川春華、大沼樵峰、田子恵琉の各氏。

○選考委員注目作

昨年に続いて選考委員注目作を選定した。

鈴木承琳、横田汀華、岩崎陽光、林和鳳、井上恵子、坂本龍水、佐藤初香、若見苑袖、岩上郁子、佐藤星沙の各氏。

○「書道芸術院前衛書展」出品者の軌跡

昨年秋季展併催としてアートサロン毎日で開催した企画展は、その後作家の足跡として、会場内に集約して陳列した。

○作品解説会

2月8日11時から前衛書展出品者の作品解説会(研究会)、14時から無鑑査・一般の解説会を会場各部分に分かれて行った。2月11日10時30分から役員作品、大作作品の作品解説会を行った。

○席上揮毫会(院展)

2月8日10時から、昨年から始めた書道芸術院春華賞、大賞、準大賞

(5名)受賞者による会場内での作品揮毫会を行った。

○全国学生書道展大賞受賞者による席上揮毫会
2月7日午前10時より開催。全国から大賞受賞者が集い、敏腕を振るっていただき、会場を盛り上げてくれた。最高賞の受賞者だけあって堂々たる揮毫ぶりに会場が緊張感に包まれ、固唾を呑んで見守った。賞にふさわしい立派な揮毫会となった。

○ワークショップ

2月8日13時から学生展の会場にて松橋馬に挑戦の内容で実施した。

○全国学生書道展表彰式

2月7日揮毫会の後、13時より浅草橋ヒューリックホールにおいて、毎日新聞社事業本部文化事業部長南敦子様をお迎えして表彰式を挙行了た。

○書道芸術院展表彰式

学生展表彰式に続いて15時30分より、同会場にて、書道芸術院展の表彰式が挙行された。

ご来賓は、毎日書道会専務理事徳増信哉様をお迎えした。

春華賞、大賞、準大賞は下谷洋子運営委員長より授与。以下の賞については、財団理事・監事により授与。ご来賓の徳増信哉様には毎日新聞社賞の授与とともに激励のご祝辞をいただいた。

最後に受賞者を代表して、書道芸術院大賞に輝いた須藤雪蓮さんからの謝辞があった。

○祝賀懇親会(出品者の集い)

2月7日17時30分から浅草橋ヒューリックホールで開催した。

○総務部

学生展、院展とも総務部は、書類搬入から作品搬入、整理、審査準備、陳列準備、撤回、搬出まで、都丸みどり、藤村昌子、お二人の部長には、長期にわたりご苦労願った。

○審査部

学生展は半田藤扇審査部長、院展は山口仙草審査部長のもと、事務局、総務部と連携し、審査、事務処理ともに順調に進めていただいた。

○会計部

会計部は院展と学生展全てにわたり、滞りなく処理していただき、事業終了後の残務も含め、近藤尚子会計部長に感謝。

○運営事務局

審査の運営や表彰式・祝賀会会場の変更、そして新たな試みの実施など、院展、学生展を通じて、運営事務局には、多大なご苦労をおかけした。また、各部の当番審査員並びに事務委員の人数割り出しをはじめとした各種業務を各部署と連携して事務処理にあたっていただいた。大内焚軒事務局長・佐藤菜扇事務局次長には、深く感謝申しあげます。



席上揮毫会 (2月8日)



作品解説会 (2月11日)

蘭亭叙 (東晉 王羲之) ②

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ (A: 大作の部 毎日展覧委員・會サイズ以内、2×6尺・全紙も可) 当該古典の左記掲載部分以外も可。
(B: 小品の部 半切以上半切以内、全紙以内も可) (A・B縦横自由)

〔解説〕「蘭亭序」の原本は今も見つかっていないが、原本に紙を重ねて精巧にかご字を取り、その中に墨を入れた双鉤填墨本が6種残っている。今回の図版はその中で「八柱第三本」と称されている善本である。首尾に唐の中宗の「神龍」の半印が押されていることから「神龍半印本」とも呼ばれている。これらの6種の本をもとに刻したものが多数作られていった。また、唐代の能書

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

である歐陽詢、虞世南、褚遂良らの臨書した刻帖も作られ、世に「蘭亭八百本」と言われるようになった。(偽物も多い、というところでもある。)
このような事情もあり、本によって書風や雰囲気も違っている。よく見れば行間や字間にも相違があり、字形まで異なっている場合もある。しかし、信頼のおける伝本であれば、行書の基本的な運筆を学べるはずである。(編集部)

※掲載図版原寸

是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰

是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰／觀宇宙之大。俯察品類之盛。／所以遊目騁懷。足以極視聽之／娛。信可樂也。夫人之相與俯仰

(北京 故宮博物院藏)

古筆鑑賞

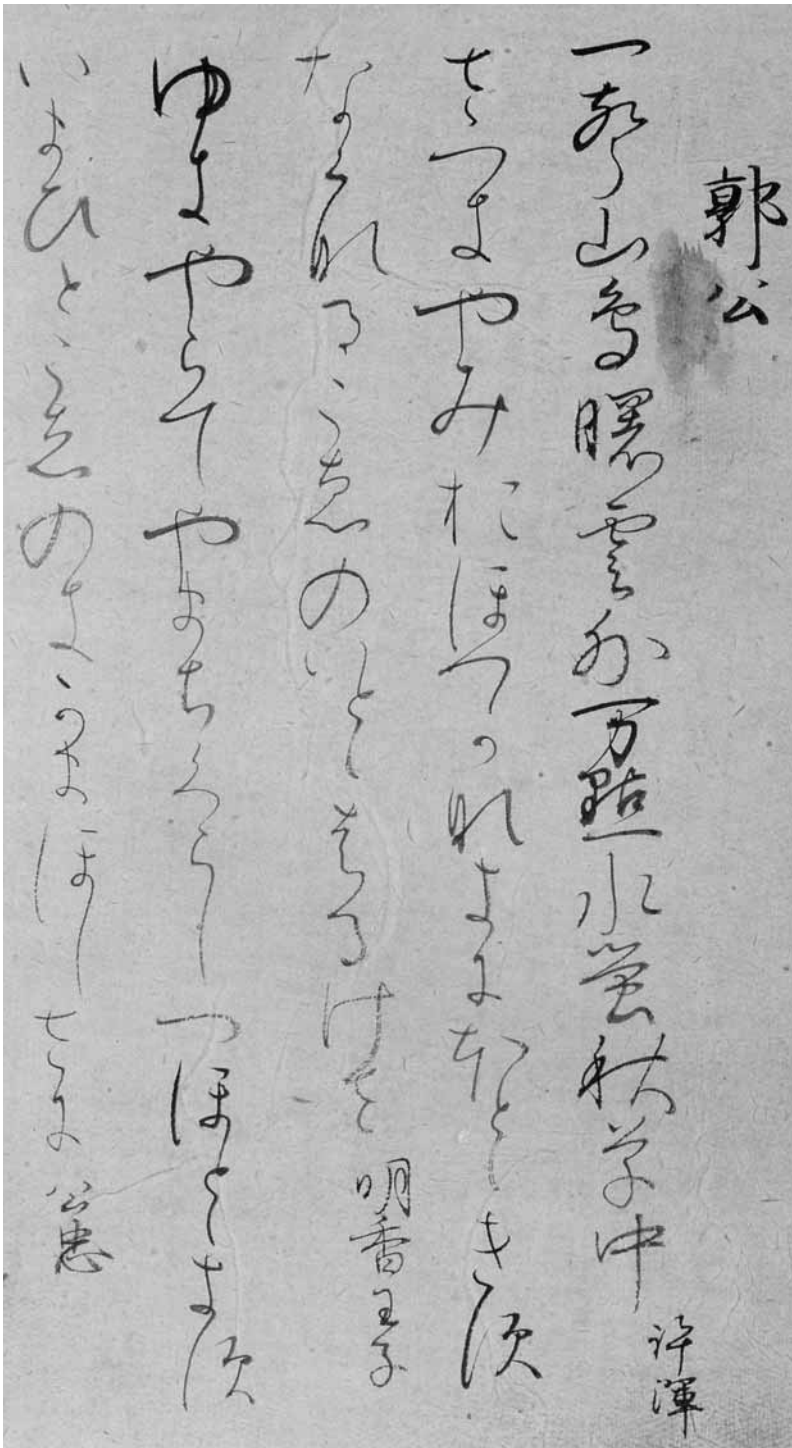
266

粘葉本和漢朗詠集
(伝藤原行成筆)

②

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨(押印のみも可)

〈よみ〉郭公／一声山鳥曙雲外、万点水蛭秋草中。許渾／さつきやみおぼつかなきにほとゝぎす／なくなるこゑのいとゞはるけさ明
(日)香王子／ゆきやらでやまぢくらしつほとゝぎす／いまひとこゑのきかまほしさに公忠



三の丸尚蔵館蔵

※掲載図版原寸

かな研究部臨書課題
特別研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用) 別紙を裁断して貼付も可。
半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)
A 大作の部 毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺、全紙も可
B 小品の部 半切以上、半切以内(縦横自由)
△いずれも左記の掲載以外も可。√

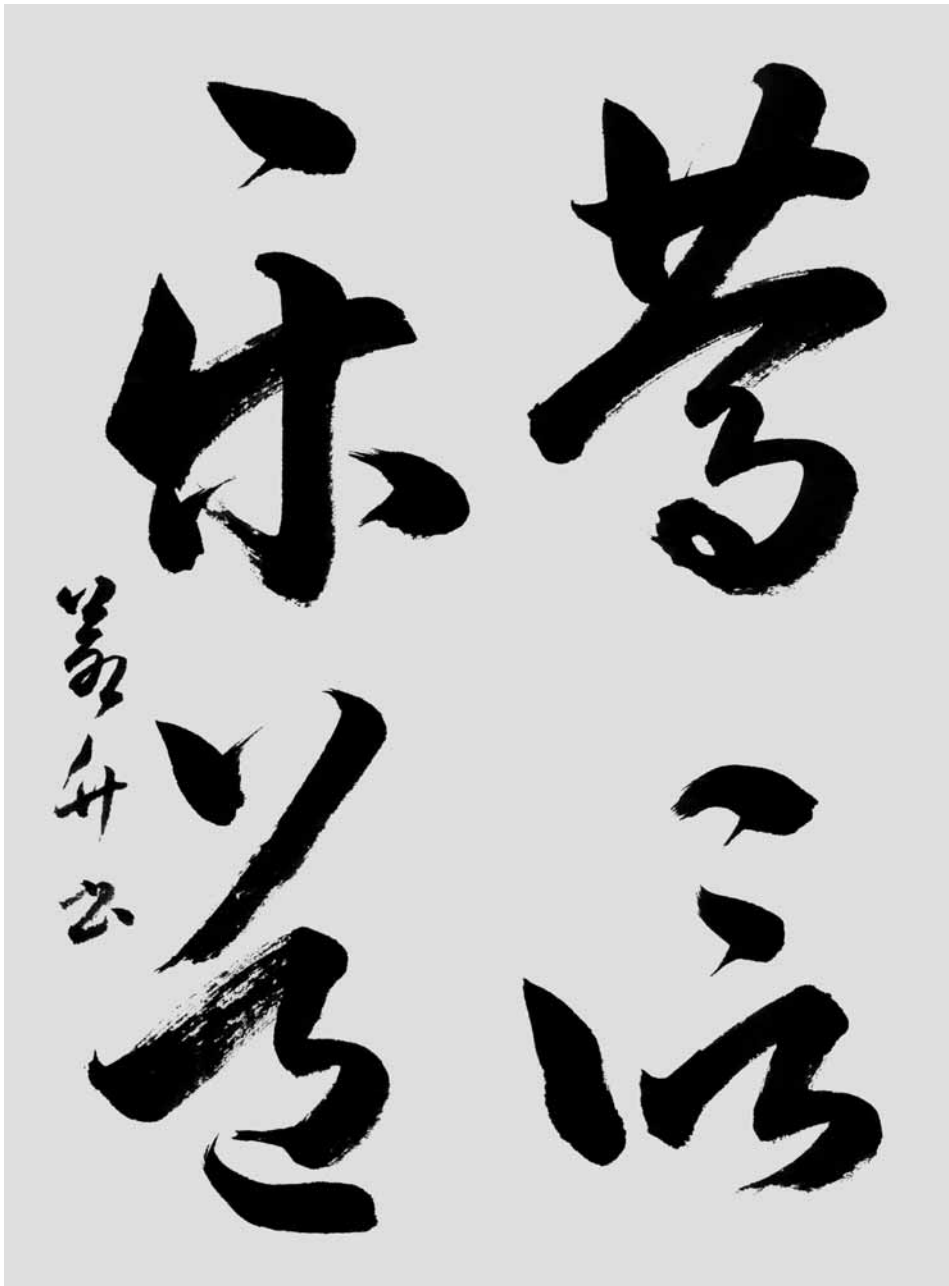
〈解説〉上記の図版は、「郭公」がテーマで、許渾の七言詩の一節(対句の部分)と明日香皇子と源公忠の夏の歌2首が書かれている部分である。漢詩は行書と草書が混ざっているの

で、面倒なようでも字書にあたってほしい。かなは高野切第三種と酷似するが、字間がやや狭く、伸びやかさが足りない。ようにも感じられる。これは紙の天地の長さが短いためだと考えられる。流れを意識して臨書したい。ほかに同じ系統の古筆としては、
・伊予切和漢朗詠集
・近衛本和漢朗詠集
・蓬菜切 などがあ
る。(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書してまじょう。

漢字規定 初段以上 【6月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書



篤信楽道

よみ (篤信道を楽しむ)

書体 自由

習い方解説 (2)

名越蒼竹

篤信楽道

(鄭道昭「鄭羲下碑」)

(篤信道を楽しむ)

人情や誠意ある行いを続ける。

全て草書体で書きました。語意は右のとおり。鄭羲下碑の文章中に出てきます。鄭羲の息子、鄭道昭が父の功績や遺徳を石崖に書いて残したもので、「下碑」というのは、それよりも上にあった崖に書いたものを「鄭羲上碑」とし、区別するために名付けられたとされます。つまり道昭は父のために碑文を2度書いたわけで、この行為こそ『篤信楽道』と言えるでしょう。

参考作は兼毫筆で書いて特に奇抜な造形ではありませんが、草書体は面白く書こうとすると、思わず読めなくなったり誤字となったりしやすいので、基本的な崩し方はしっかりマスターしたいものです。華やかさよりも落ち着きのある書き振りを目指して筆を執りました。

漢字規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

鈴木英晴 選書



尋水望山 よみ (水を尋ね山を望む)

書体Ⅱ楷書に限る

習い方解説 (2)

鈴木英晴

尋水望山 (四字熟語)

(水を尋ね山を望む)

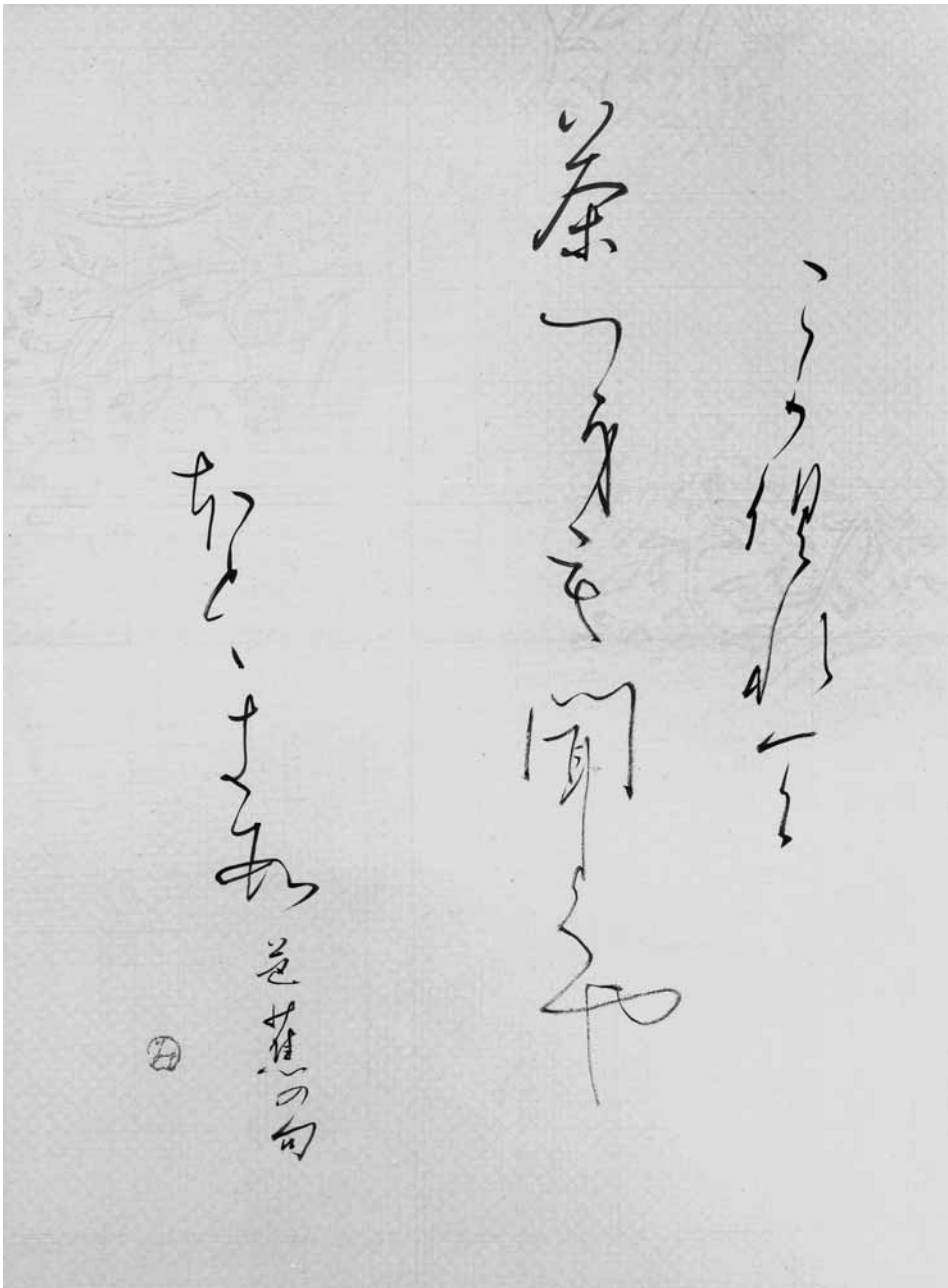
景色の良い水郷を訪ね、山々を眺めること。山水を愛すること。

今回も風光明媚な風景を連想しながら、智永真草千字文の小川本を意識して書いてみました。真は楷書、草は草書で、千字文を二つの書体で書いています。真草千字文は隋の時代に書かれています。関中本は唐代に書かれた孔子廟堂碑とたいへん似通っています。一方、小川本は用筆も字形も隋代の雰囲気を残し、縦横の線の太さに変化をもたせ、ゆったりと書かれていますので、その雰囲気を損ねないように筆を持ちました。

本誌の昨年4月号から6月号までの古典鑑賞のページに掲載されて、研究部の課題となりましたので、何度も臨書された方も多いと思います。ぜひ参考になさってください。筆は麴毛の中鋒を使用しました。

かな規定 初段以上 【6月15日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

平川峰子 選書



よみ方 木(こ)隠(可俱れ)て(天)茶(つみ)身(も)毛(聞)く(久)や時鳥(本と、支数)

創作

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

習い方解説 (2)

平川峰子

木こ隠かくれて茶ちやつみも聞きくや時鳥ほととぎす

(松尾芭蕉)

「茶摘」は茶摘女のこと。茶畑で茶摘女が茶の木に見えがくれている。折からほととぎすの声を聞いたであろうかの意。

元禄7年(1694)、芭蕉が最後の旅に出る前に江戸芭蕉庵で詠んだ句。

俳句を作品にする場合、余白をどのように取るか考慮しますが、今月号は自然な3行書きにしました。行間は同じ広さではなく変化をつけてみてください。

潤濁は大切です。墨継ぎは「本」で、その前の「聞くや」は濁筆にしてください。

「木隠れて」「ほととぎす」を変体がなげ置き換える時は字典が参考になります。

『かな表現字典』清水透石編(二玄社)など。

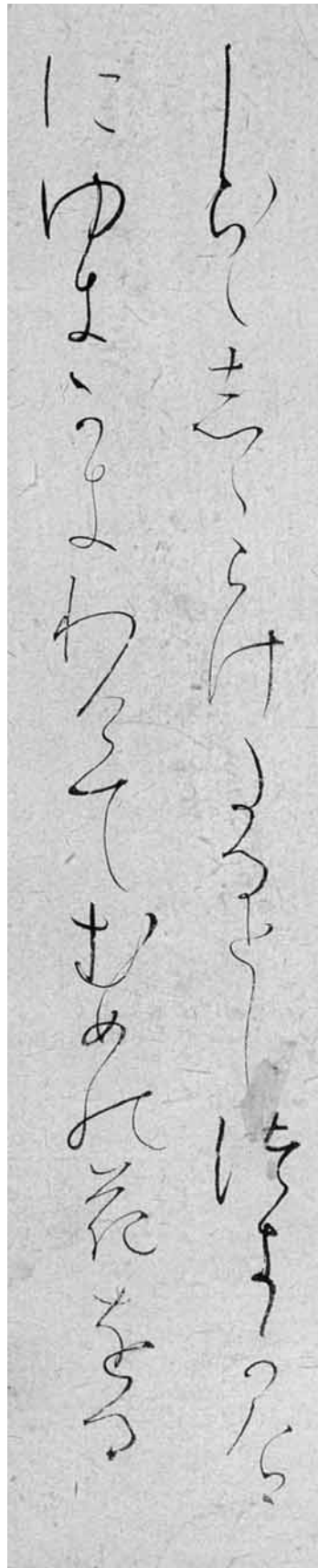
〈注〉「木隠て」は「木隠れて」と書いてもよい。

かな規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。

粘葉本和漢朗詠集(掲載写真拡大120%)

「お知らせ」次号より、かな規定・秀級以下の課題は「高野切第一種」になります。

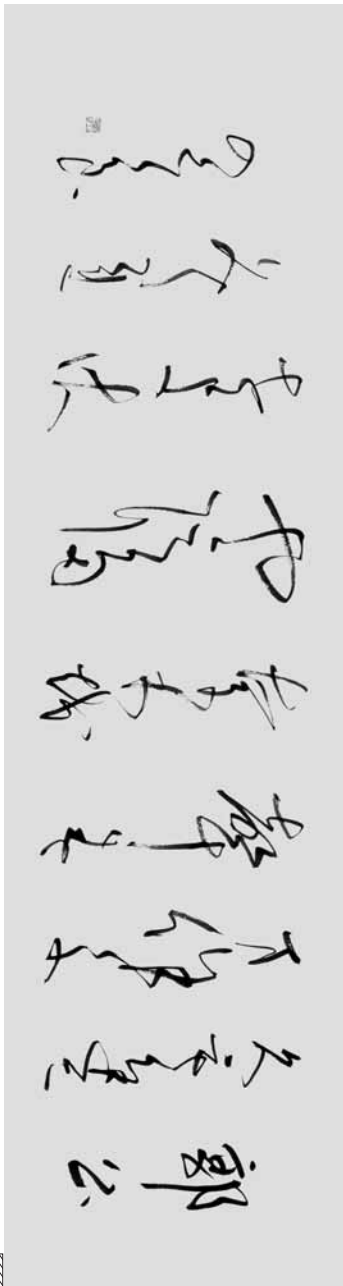


よみ方 しらくしらくらけたるとしつきかげ
にゆきかきわけてむめの花をる

歌意

問い 白く見えるものは何? 答:白髪の老人が白い月光の下で白雪をかきわけて白梅の枝を折る様子。(あら、まあ、わざとらしすぎて興ざめな答だこと。↑でも最初から「白々しい(興ざめな)もの」をお尋ねになったではありませんか。)

かな条幅規定 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可) 京 絹子 選書



よみ方 郭公雲路(久毛遅)に(二)ま(万)よ(餘)ふ声す(春)な(奈)り(利)

小(越)止(や)み(三)だ(多)に(耳)せ(世)よ五月雨(佐み多連)の空(そ良)

※ヨコ形式に限る

創作



出品券

貼付位置

習い方解説 (2)

京 絹子

郭公雲路にまよふ声すなり
小止みだにせよ五月雨の空

(源経信「金葉集」)

今回は横作品ですが、基本的な形式にしました。船底形で書き出しは低く、中央は少し大きめにしています。「声」は中央に近く全体を引き締めるため少し画数の多い字を選択しました。その作品に合う字を選びセンスを磨いて下さい。墨継ぎは「越」です。

漢字条幅規定 初段以上 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書



獨坐幽篁裏 彈琴復長嘯 深林人不知 明月來相照 (王維)
(ひとり坐す幽篁の裏 琴を弾じ復た長嘯す 深林人知らず 明月来って相照らす)

書体 自由

出品券
貼付位置

漢字条幅規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大平邑峰選書



筆端應解化龍飛 (楊凝式)
(筆端応に龍と化して飛ぶを解すべし)

書体 自由

習い方解説 (2)

種谷萬城

横形式に漢簡を参考に書きました。20世紀初頭に、中国西域の遺跡から、肉筆文書である漢代の木簡が多数発見され、その後の発掘調査で、中国各地から簡牘が大量に出土しました。漢簡には、筆の穂先の開閉を自在に用い、生命感に溢れ、躍動的な線が見られます。特に装飾的な波磔には、多彩な表情があり、大変魅力的です。

※ヨコ形式に限る

習い方解説 (2)

大平邑峰

今月は、先月と同じく1行7文字ですが、比較的画数の多い文字を含む語句を選びました。文字の大小・太細・墨量の変化に留意しながら1行を書き通すリズムをつかむことに腐心しました。文字が並んだだけにならないよう、落筆高く腕を大きく動かすことを実践してみてください。(参考：蘭亭叙)

里わの灯影も 木林の色も
田中の小路をたどる人も
蛙のなくねもかねの音も
さながら霞める 朧月夜
朧月夜より 紅瑤書

書体＝自由

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守って下さい。

【注意】

習い方解説 (2)

倉林紅瑤

唱歌「朧月夜」の作詞者は、長野県中野市出身の国文学者高野辰之です。北信濃の春の田園風景を題材に作詞した叙情的な名曲です。

今月の手本課題は、「朧月夜」の2番の歌詞です。すっかり日が暮れて、遠くの里の灯り、蛙の声や寺の鐘の音がみなかすんでいるような夜の情景が描かれています。

「ペン字規定」は、初級から師範まで同じ課題です。漢字かな交じりの歌詞は漢字と平がなの調和が大切です。「漢字は楷書、平がなは単体」や「漢字を行書、平がなを少し連綿」などさまざまな書き方があります。参考手本にこだわらず、いろいろな書き方を試みて下さい。

里わの灯影も 森の色も
田中の小路を たどる人も
蛙のなくねも かねの音も
さながら霞める 朧月夜
「朧月夜」より ○○書

七十二候について

中国古代の季節の区分。『礼記』
に、五日を一候として七十二候、
三候を一気として二十四気、
六候を一月として十二月と
するとある。

佐藤希雲

(掲載手本85%に縮小)

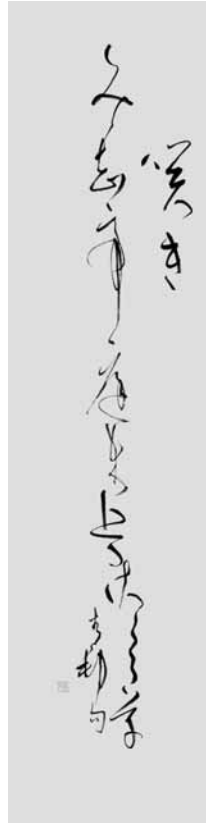
- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の氏名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る

七十二候について／中国古代の季節の区分。『礼記』に、五日を一候として七十二候、
三候を一気として二十四気、六候を一月として十二月と／するとある。／氏名



漢字条幅部 師範 板橋 雅芳
光明皇后「案教論」を彷彿とさせる。変化に富む筆法は巧妙。表情豊かな線は上質で充実している。

◎漢字条幅部総評 上級の行草作品に草書字形の不明瞭なものが目立った。古典学習の不足か。下級にも優品が見られた。(萬城評)



かな条幅部 二段 木村 幸代
切れ味よく颯爽としたリズムでモダンな作品。穂先の生彩な動きが紙背にくい込みより深みを出す。

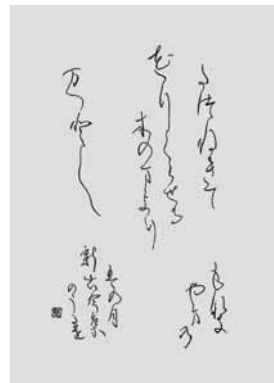
◎かな条幅部総評 全体にバランスの欠けた作品が多かった。また、古筆にもあるように、細くても筆の上下動は大切。(洋子評)

ペン字部 師範 中原 純子
ペン先を活かし切った筆遣いによって、一文字一文字に秘められた豊かな表情が溢れる魅力的な作品。◎ペン字部総評 行間がよい作品が多かった。カタカナは漢字よりやや小さめに書くことで全体のバランスがよくなります。(孝子評)

やなせたかし著「やさしいライオン」はみなさんライオンの赤ちゃんとお母さんかわりの犬ムムラのお話です。表情がやさしいなあ、読み聞かせていると終わりのページ急展開、純子(國)



現代詩文書部 特選 森田 藤谷
線が勁く穂先の開閉による多彩な線質で詩情豊か。構成が見事で余白が美しい。落款味わい深い。◎現代詩文書部総評 書き手の技術力と内面性の両輪が必要、そして感性も大切。(恵鳳評)



かな部 師範 塚本ちえ子
抑揚の変化とリズム感のある線条に気を配っている作品で、強い線質が立体的な効果を生んでいる。◎かな部総評 散らし構成と墨量の変化に気をつけた作品が多くなると好感が持てた。(峰子評)



前衛書部 特選 萩原 綾雪
宿墨の特性を活かした立体感溢れる作。余白も美しく、用筆に力みなく若々しい感性を感じさせる。◎前衛書部総評 躍動感ある作品多数。より用具用材の特長を知り印象的表現の工夫を。(紅瑤評)



漢字部 師範 田中 岳舟
多彩な線と、躍動感から生まれる造形の妙は群を抜いて素晴らしい。印がないのが惜しまれる。◎漢字部総評 文字造形の根幹をなすものは線質の鍛練とリズムだと思ふ。古典に内在する空気感を捉える眼を養いたい。(石雲評)

前衛書部 (特選)

現代詩文書部 (特選)



みどり 濃墨による豪快な筆致見事
 雅 悠 墨色と滲みの広がり印象的
 理 恵子 濃淡の美しい墨色爽やかな作
 紫 江 巧みな筆捌き、気迫漲る
 琢 翠 広がりある渴筆雄大な作

彩 紅 大胆な構成と表現力圧感
 友 香里 美しい渴筆現代的で爽快
 久 子 爽快、スケール大きな世界
 壱 山 淡墨と鋭く深い細線融合
 有 津 堂々たる筆勢、飛筆効果的

選評 倉林 紅 瑤

哲 一 閑 山 緑
 子 琴 美 房 風
 線動く朴訥の中に知性あり
 大胆で気宇雄大気迫漲る
 自然な構成で渴筆線動い
 情景が目に浮かび楽しい

美 帆 一貫した運筆温か味あり
 紅 霞 線の勁さが余白に響く
 智 美 詩情豊かで味わい深い
 苑 柚 運腕大きく威風堂々の作
 洋 硯 筆意筆勢抜群落款も見事

青 仙 味わい深く青墨冴える
 彩 香 温雅で心和む落款も絶妙
 光 耀 気宇雄大で完成度が高い
 春 緑 構成面白く味わい深い
 翠 淡々と運筆、しかも流麗

舞 夢 墨色美冴え格調高く温雅
 四 峯 大胆な運筆細線切れきれ
 和 江 潤濁見事で詩情豊かな作
 雅 悠 濃墨長鋒の線質がよい
 藤 象 流れが自然で品位が高い

選評 飯 沼 恵 鳳

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 種谷萬城 田村鄭雲 山口仙草

小品の部

現代詩文書 (宗苑) 白井真理 「小樽にしん挽歌」

◆紙面の構成が巧みで立体的な作品となった。直線と曲線を自在に組み合わせ深い潤筆と軽快な細線が鮮やかな白を生む。振幅も大きく味わい深い作品である。

(鄭雲評)



白井真理書

35×135cm

前衛書 (蓮紅)

大友紅蓉
「心躍る季節」



◆濃墨の作品で文字間の造形が美しく、筆の動きが多岐にわたって独自の線条を創り出している。落款の位置一考を。

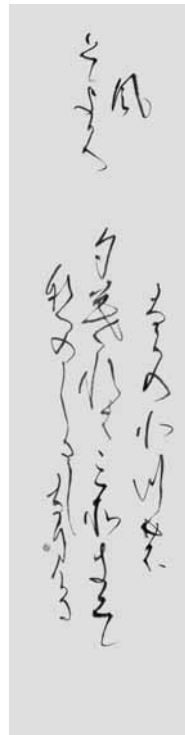
大友紅蓉書

(仙草評)

135×35cm

かな (宗苑)

茂木絢水
「風そよぐ」



茂木絢水書

◆作品の構成は理に適い、字の大小・行間の広狭とバランスよく収める。運筆の調子が同じように見えるので、遅筆部分も入りたい。

(洋子評)

135×35cm

臨書 (若葉)

工藤山房
「蘇慈墓誌銘」



工藤山房臨

◆引き締った直線が美しい。起筆、送筆、収筆の処理が適確。字形も端正。余白も美しく完成度の高い臨書作品。

(萬城評)

135×35cm

〈小品の部〉

総出品点数
74点

創作の部(40点)
漢字 5点
かな 1点
現代 1点
篆刻 2点
前衛 9点
臨書の部(34点)
漢字 31点
かな 3点

〈特選候補者〉
〔創作の部〕
四枝及川 豊流
麗澤長谷川 翠
青蓮山崎 恵
一弦渋谷 蛍江
麗澤石澤 紫流
四枝伊藤 蒼風
炎佳伊藤 蒼風
蒼風伊藤 久子
伊呂齋藤 久子
大拙佐藤 信子
秀水門脇 信子
蒼原庄司 櫻空
〔臨書の部〕
澄春 新行内 芳蘭
大雲 日高 右真
洞書 安藤 楊風
澄光 佐藤 光耀
堂春 石橋 幽影
京橋 豊嶋 勝景
八街 十河 永翔
八か 相野 天翔
八か 相野 天翔
蓮紅 本田 美雪

大作の部

臨書 (菊月)

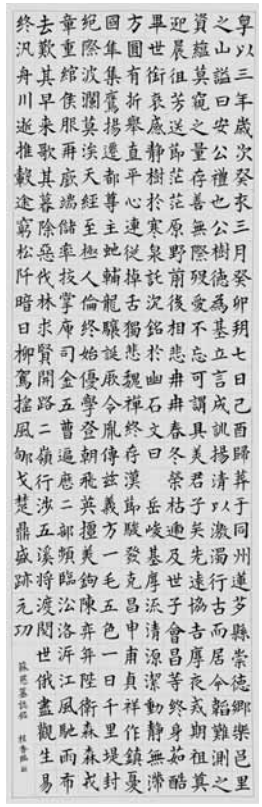
新井恵子
「曼殊院本古今集」



新井恵子臨 61×121cm

◆一貫したリズムを滔々として続け、字形把握も乱れなくよくつかむ。墨の濃度も適格で美しい。強いて述べれば潤筆の部分でもう少し穂先を使いたい。(洋子評)

臨書 (千葉) 佐藤桂香 「蘇慈墓誌銘」



175×55cm



◆細く澄んだ直線が美しい。字形も整い、美しい。終始一貫した神経の行き届いた臨書で、その集中力の継続に敬意を表する。完成度の高い臨書作品です。(萬城評)

佐藤桂香臨

前衛書 (紅瑤) 川田弘子 「特」



川田弘子書

180×60cm

◆豪快な筆遣いで上部から下部までリズムよく書けている。渴筆がきいて強く明るい作品となり、終筆までうまくまとめている。(仙草評)

(仙草評)

現代詩文書 (八戸)

市川紫泉
「俵万智の歌」



市川紫泉書

60×180cm

◆大字は直線の切れ味を生かし墨量充分の姿で余白も生き生きとしている。細字は粉雪の舞うごとく幽遠な景色が浮かぶ。快作である。(鄭雲評)

(鄭雲評)

〈大作の部〉

創作の部(33点)	漢字 2点
かな 3点	現代 8点
前衛 20点	臨書の部(5点)
漢字 4点	かな 1点
総出品点数 38点	

〈特選候補者〉

- 〔創作の部〕 大拙 島中 成山
- 〔漢字〕 創珠 阿部 珠翠 水荃 清水 蘭舟
- 〔現代詩〕 翠柳 加藤 紫翠 素朴 坂本 素朴 四枝 大友 四峰
- 〔前衛〕 紅瑤 廣田 紫書 游 庄司 咏 月華 浅野 玉翠 青蓮 大町 菜園 容洲 阿部 邑里 一弦 道塚 紫音 玉州 遠藤 和香 松風 西條 松雲 白珠 村井 利喜
- 〔臨書の部〕 大雲 宮原 香扇 遊山 紺野 遊山 大雲 舟寶 恵美

漢字研究部
(蘇慈墓誌銘)

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



佐藤綾奈

漢字研究部 特選 佐藤綾奈
線質シャープで、スピード感あるスケール
大きな堂々とした臨書作品です。繰り返しの
臨書で運筆に余裕を感じ取れます。繰り返しの
き合う真摯な姿勢が伝わり、日々の学書の成
果が表われました。更なるご精進を！
◎漢字研究部総評
墓誌は、その人の経歴や遺徳を称えて書か
れたものですから、臨書するにあたっては畏

敬の念をもって一点一画丁寧に気持ちをこめ
て運筆することが大事です。幸いにも蘇孝慈
墓誌は原帖は大変明確に見てとることができ
ます。起筆、収筆、転折、とめ、はらい等、
筆遣いが明快です。端正で美しい字形も多く
あります。時間をかけて丁寧な学書を心がけ
る姿勢を身につけていかれますことを切望い
たします。



遊山 跡



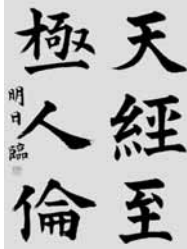
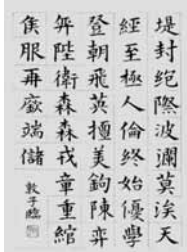
和枝 跡



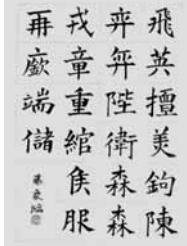
和加江 跡



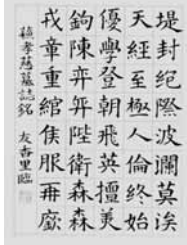
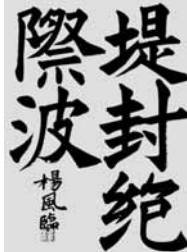
末洞 跡



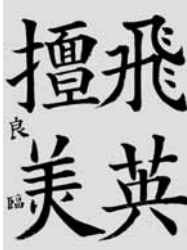
明日 跡



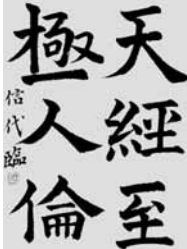
幽春 跡



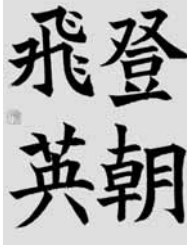
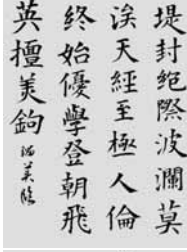
蘇孝慈墓誌銘 友香里 跡



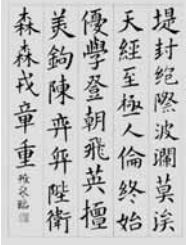
良 跡



信代 跡



美智 跡



遊山 和枝 史篁 和枝 遊山
みどり 和枝 史篁 和枝 遊山
和加江 末洞 和加江 末洞 和加江 末洞
敦日 藤象 幽春 幽春 幽春 幽春
揚風 幽春 揚風 幽春 揚風 幽春
友香里 揚風 友香里 揚風 友香里 揚風
良代子 信水 良代子 信水 良代子 信水
信水 信水 信水 信水 信水 信水
美智子 美智子 美智子 美智子 美智子 美智子
玉泉 雪蓮 玉泉 雪蓮 玉泉 雪蓮
豐志 豐志 豐志 豐志 豐志 豐志
八重子 八重子 八重子 八重子 八重子 八重子
惠美 惠美 惠美 惠美 惠美 惠美
雅泉 雅泉 雅泉 雅泉 雅泉 雅泉

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字27点・かな13点)

選評 小竹石雲・平川峰子
漢字秀逸作



佐藤 一義



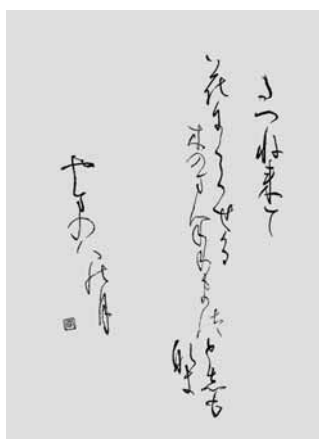
井ノ口春峰



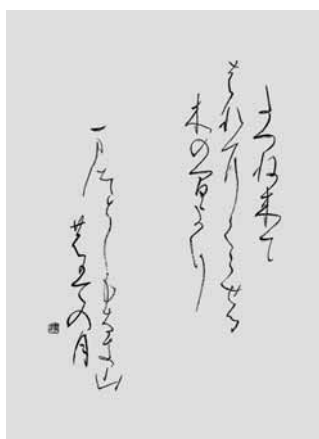
西川 藤象



江本 興舟



松永 香秋



菅原 澤花

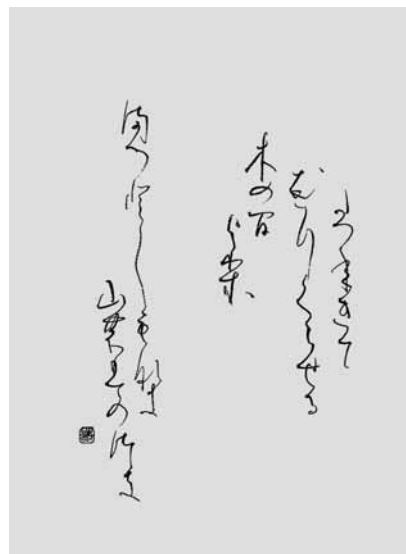
〈次点・50音順〉

大内 熒軒



甲乙つけ難い常連の力作揃い。自己を見据えてのこの作の裏には並々なる気概と技の蓄積を感じる。その全てを見せず余裕をもたせた緊張感が深い。
(石雲評)

かな秀逸作



齋藤 杏邑

2つに分けた散らしの構成と各行の長さの変化が魅力的です。1文字1文字が強い線質で全体は品格のある作品に仕上がっています。
(峰子評)

令和8年度 書写書道教育講演会

日時：令和8年6月4日(木) 14:00~15:30

会場：上野精養軒3階 桐の間(上野公園内)

東京都台東区上野公園4-58 TEL 03-3821-2181

《演題》「地域と連携して書道を伝える
～学習指導要領の方向性と部活動改革～」

《講師》公益財団法人 日本国際教育支援協会 理事長
公益社団法人 全日本書道連盟 外部理事
元 文部科学省 文部科学審議官 藤江 陽子氏

ほかに行政関係者、地域部活動実践者等の登壇を予定

※聴講希望の方は、直接、全日本書道連盟(TEL:03-5294-1371)に連絡して下さい。

◎先月号の『ペン字基礎基本講座』の作例を再掲します。

ペン字基礎基本講座(3)

川村美泉

①左右対称にする

合求東

②点画の間を均分にする

言世形

③外形を整える

大 国 四 赤

④偏と旁のバランスをとる

場味動即

⑤上下からなる文字

雲 童
中心を考える

⑥3部からなる文字

側 勢
緊密に

第六十回記念弘法大師奉賛

高野山競書大会

併催 第四十一回日中青少年友好交流競書大会



作品締切

2026年5月11日(月)

表彰式

7月31日(金)

(状況により、変更になる可能性があります。)

展覧会

総本山金剛峯寺

7月31日(金)~8月16日(日)

(状況により、変更になる可能性があります。)

高野山東京別院

8月28日(金)~8月30日(日)

(状況により、変更になる可能性があります。)

主催 / 高野山総本山金剛峯寺 主管 / 高野山書道協会
後援 / 毎日新聞社・全日本書道連盟・高野町教育委員会
高野山住職会・高野山根連会・高野山真言宗参与会

問い合わせ先 / 総本山金剛峯寺内

高野山競書大会総本部

〒648-0294 和歌山県伊都郡高野町高野山132

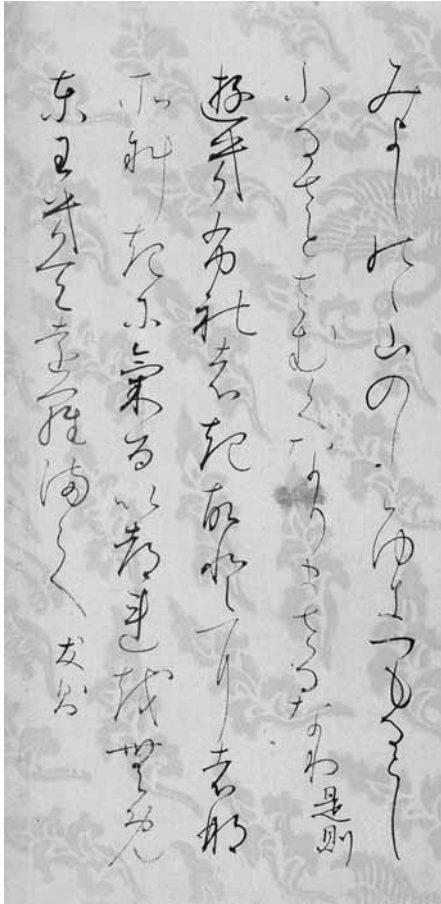
☎0736-56-2012(直)



公式サイト

古筆鑑賞 287

粘葉本和漢朗詠集 (伝 藤原行成筆) ③

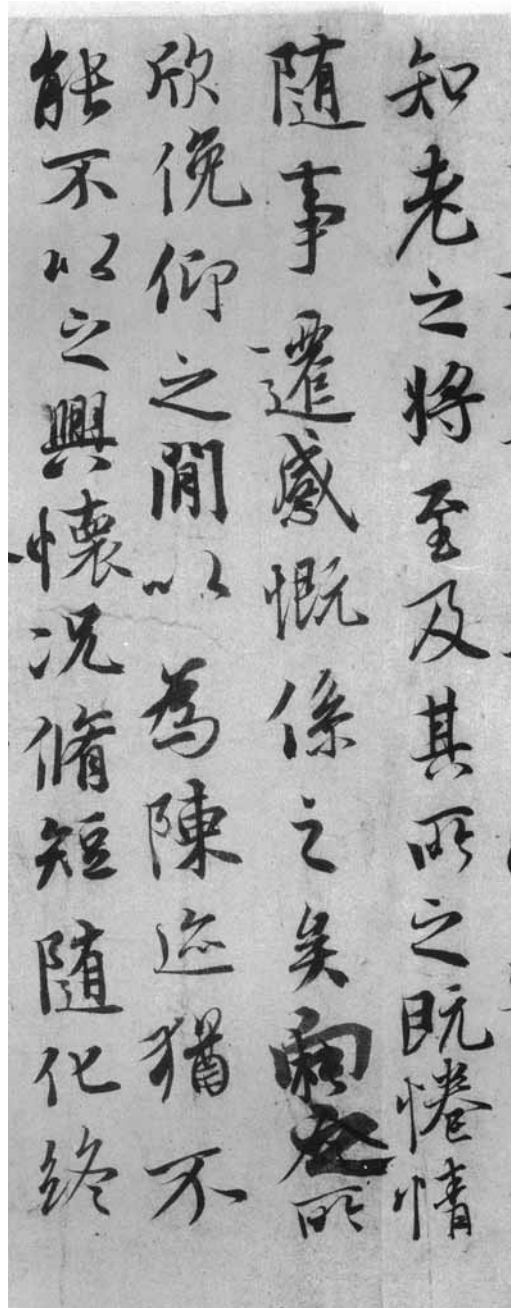


(掲載図版・60%に縮小)

みよしのゝ山のしらゆきつもるらし／ふるさ
 とさむくなりまさるなり是則／ゆきふれ
 とさむくなりまさるなり是則／ゆきふれ
 故にそなへてそなへてそなへてそなへて
 王義之はな／ぞさきにけるいづれをむめ／と
 わきてをらまし友則

古典鑑賞 493

蘭亭叙 (東晋 王羲之) ③



(掲載図版・70%に縮小)

知老之將至。及其所之既倦。情／隨事遷。感慨係之矣。向之所欣。俛仰之間。以為陳迹。猶不／能以之興懷。況脩短隨化。終

書展

第10回

小燕会書展

小伏小扇

会期 令和8年3月25日(水)

29日(日)

会場 奈良県立万葉文化館

桜の花がほころびはじめ、吹く風もさわやかに春を感じる明日香の地に奈良県立万葉文化館があります。小燕会書展は3年に1回の開催で、今回の第10回展で30年を経たこととなります。



会場に入りますと、メインの壁面に小燕先生の超大作「今」(360×360)が会場をひきしめていました。幹部の方々も、自分の表現を求めて用紙のサイズや墨色の好みに個性が光りました。

テーマの「今を生きる」をもとにして、今、感じているもの、大切にしているもの、思い出、願い、祈りなどを、各自が自由な表現で作品にしておられ、どの作品からも楽しさが感じられました。

なかでも5人の大学生が、自分自身の今の思いを素直に表現した作品が新鮮で、目をひきました。

会場の一隅に第1回展からの案内葉書を表示しており、なつかしさが込みあげました。

小燕会には、若い人達が育っておられ、ますますの御発展をお祈りします。

第59回

玉松会書展

大内熒軒

会期 令和8年4月7日(火)

12日(日)

会場 鳩居堂画廊

東京といえば銀座4丁目交差点。平日にもかかわらず大勢の人が行き交っていました。書展会場に入ると、多くの参観者と、海外の方もおり異国の話し声が聞こえ、当会会員の受付の方が対応されておりました。

会場には、永井幸子先生の遺作はじめ石井明子先生の作品、当会幹部、会員の方の作品がさまざまな形式で彩られ飾られておりました。かなは料紙の美と墨との関係に繊細さを感じます。

3、4階とも流麗で意欲的な作品が会場を埋め、出品者の日頃の学び、各種



会場風景 (3階)

展覧会等への出品を通じて積まれた研鑽の成果が発表されておりました。小島会長は和装のお召しもので参観者をお迎えし、会場内は華やきやかな空間でした。また2月に亡くなられた当会の重鎮である山下薫先生の刻字によるかな作品を初めて拝見し表現の幅を感じました。

来年は60周年とのこと。世代交代した小島会長のもと1年が経過し、歴史を刻んできた玉松会の皆様の今後ますますのご活躍が楽しみです。

競書出品規定

※規定部・自由部・研究部は、月別出品券を貼ったバーコード出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※特別研究部は所定の出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※半紙は縦使用に限る。

※落款(印のみも可)を入れる。

●出品資格 高校生以上

●月例競書作品出品の心得

- 1、締切日必着厳守
- 2、月別出品券を貼付していないバーコード出品券は認めない
- 3、月別出品券のコピーは不可
- 4、(一)初めて出品のときは「10級」と書く
(二)「課題違反」・「落款なし」等の違反作品は審査対象外とし、違反作品として氏名を掲載します。

※▲印段級誤記入

※△印作品審査後着

*段級欄に記入する数字は、級位は算用数字1、2、3...
段位は漢数字 初、二、三...
で書いてください。

*級位の方は、出品する月の本誌(最新号)で成績を調査確認の上、級を記入してください。確認できないときは、現在級を書き「未調査」と明記してください。

●規定部(自分の段・級で出品)

部門	段級位	用紙	書体・内容
字	初段以上	半紙	創(書体自由)作
漢	秀級以下	半紙	創作(楷書)
な	初段以上	半紙	創作
か	秀級以下	半紙	臨書
漢字条幅	初段以上	半切	創(書体自由)作
かな条幅	秀級以下	半切	創(書体自由)作
ペン字	10師級	はがきサイズ	書体自由

●かな、かな条幅部門は料紙使用可。

●研究部(掲載課題の臨書)

部門	用紙	内容
漢字研究	半紙	文字数自由
かな研究	半紙	歌1首以上を書く、全文も可

●掲載部分以外の箇所は不可。
●かな研究部門は料紙使用可。
●料紙貼りつけ可。

●自由部(段、級によらないもの)

部門	用紙	内容
前衛書	半紙	創作
現代詩書	半紙	創作
実用書	左記	書体自由

△実用書部門・出品規定▽

- 用紙 半紙横 24.5×16.5 cm、B5コピー用紙 26×18.1 cmも可。
- 課題 掲載語句を書く。
- 小筆、筆ペン、サインペンも可。

●特別研究部

- 大作または小品のどちらかに1点出品する。
- 詳細は出品票の掲載ページを参照のこと。

☆審査委員の部について

- 「漢字部門初段以上」と「かな部門初段以上」に審査委員のみが出品できる部を設ける。
- バーコード出品券の段級欄に「審査会員」と記入する。
- 通常の競書との重複出品は不可。

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954
FAX(03)3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。(土・日・祝日は休み)

送料

- 1か月の購読部数がある
- 1部～9部までの1回の郵送料
- 1部 79円
- 2部 95円
- 3部 103円
- 4部 119円
- 5部 135円
- 6部 151円
- 7部 167円
- 8部 183円
- 9部 199円
- 10部以上は送料免除

令和八年 四月二十五日印刷
令和八年 五月一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 下谷洋子

発行人 株式会社リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
電話(03)3862-1195 4
FAX(03)3862-1195 7
振替001501411350058
http://www.jlins.co.jp/shogei/

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和八年 四月二十五日 印刷
令和八年 五月一日 発行

(毎月一回一日発行) 書道芸術 第七八一号